五十万冊の雑務帳

水上勉

新潮文庫

五番町夕霧楼

新潮文庫　　み-7-1

昭和四十一年四月十日　発行
昭和六十二年十二月二十五日　四十刷改版
平成　元年九月五日　四十二刷

著者　水上勉
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Tsutomu Mizukami 1963 Printed in Japan

ISBN4-10-114101-0 C0193

新潮文庫

五番町夕霧楼

水上　勉著

新潮社版

五番町夕霧楼

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

京都の古い遊廓として栄えた西陣の五番町で、かなり名のとおった夕霧楼の主人である酒前伊作が、疎開先の与謝半島の突端にある樽泊で急逝したのは、昭和二十六年の初秋である。酒前伊作は、終戦の年の春ごろから、京都が空襲を受けるものときめて、夕霧楼の商売に見切りをつけて、単身で与謝の生家へ帰っていた。

伊作はすでにそのころから、持ち前の神経痛がひどくなりはじめていて、馴れない畑仕事の辛労の上に、食糧難の耐乏生活もあってか、すっかり軀を弱らせていた。しかし、強情な伊作は、無人のまま捨てていた生家の屋根をふきかえたり、根太のくさった建具をやりなおしたりして、古家を小綺麗な家につくりかえていた。人手に渡っていた田畑もとりもどして、老後を樽泊で送ろうという心算だったらしい。

自給自足の体制がようやくにしてととのったところへ、敗け戦と決った。伊作は大きく落胆した。燈火管制もなくなり、世の中が嘘のような平和にもどると、誰もが都会へ帰ってゆくのに、伊作だけは、部落にのこって京へ帰ろうとはしなかった。

死因は持病の神経痛に、栄養失調からくる脚気が昂進した心臓衰弱だった。六十七という年齢も、病気に対する抵抗力をなくしていたといえたかもしれない。

その日の朝、伊作は、いつものように海岸へ散歩にゆくといって村を出て、だらだら坂になった村はずれの石ころ道を下りていったが、遠くに経ケ岬の燈台のかすんでみえる海が、うす墨を刷いたように灰いろにひらけてみえる崖の上の平坦地で、急に咽喉がつまるような圧迫をおぼえてしゃがみこみ、そのまま村人にかつぎこまれた。その時は、もう元気がなく、とろんとしたうつろな瞳を周囲の者にむけて、

「おかつをよんでくれ、おかつをよんでくれ」

と力のない声で二どいった。

おかつというのは、当時、五番町に残っていて、夕霧楼をきりもりしていた当年五十三になる伊作の最後の女のことである。伊作は死ぬ七年ほど前に本妻のかな江を高台寺の家で亡くしていたが、それからは正妻をむかえず、二号であったかつ枝を夕霧楼に入れて差配させていた。

若いころから女道楽をした伊作は、不思議とどの女にも子がなかった。戦争のためとはいうものの、晩年を与謝の在所で送らねばならない境遇になってみると、もうこのまま村で余生を送りたくなったという気持もわからぬでもない。しかし、死に際に会っておきたいと思った身内はやはり京の女、二号のかつ枝しかなかったわけであった。

与謝から京の五番町へ電報が打たれた。夕霧楼のかつ枝が、久子という古くからいる妓を供につれて、樽泊へかけつけてきた時は、それでも伊作が息をひきとる三十分ほど前であった。

「あんた」
とかつ枝は伊作の寝ているふとんに膝をすりよせ、しめったタオルで伊作の顔をふきながらいった。
「あんたは京は焼ける、きっと焼けるといいづめやった。せやけど、マッカーサーさんは京だけは空襲せんとそのままにしておいてくれはりましたンどすえ。夕霧もな、あんた、また商売がでけるようになりました。……久子はんも、照千代はんも、雛ちゃんもみんな挺身隊からもどってきやはって、えろうにぎやかになりましたえ。新しい妓ォもふえて……昔のようになりましたさかい、いっぺんあんたに来てもろて、見てもらお思うてました矢先やのに……」
「そうか、おかつ。そんだけ夕霧はにぎやかになったか」
と、とぎれとぎれにいい、大きな安堵感が襲ったものか、にんまりと草色の口角をほころばせた。そうして、かつ枝の横に太った臼のような尻を横ずわりにして、汗をかき、神妙に控えている妓の脂ぎった顔をみた。
「久子か」
と伊作はいった。苦しそうであった。それだけいって、そのまま眼をつぶった。かつ枝と久子が枕元をはさむようにして軀をせり出し、名を何どもよんだが、伊作は二どと口をひらかなかった。孤独な最期といえた。
伊作の枕もとには血の通わない遠縁の者たちが四、五人坐っていたが、どの男女も、かつ

枝と久子の顔をじろじろみつめているだけで、座敷には妙な違和感がながれた。

かつ枝は、伊作といっしょになる前は、同じ西陣の上七軒で芸妓をしていただけあって、五十三だというのに、まだ、若々しい色艶の出た白い顔をしていた。小鼻のゆたかにふくらんだ造作のととのった顔だちで、豊満な軀だった。こんな女を二号にして、夕霧の名義も呉れてやっていた伊作が、どうして正妻に迎えなかったのかと、死んだ当人を前にして、その了簡を理解しかねる村人もいたようである。

実は、伊作は生涯自分がえらんだ妓楼経営に不本意な気持をいだきつづけていた。樽泊へ帰っても、村の連中には、くわしく京都での事業については喋ったこともなかったし、封建色の濃い小さな部落だから、そのような女を売買する水商売を嫌う慣習もあったのである。村人の中には伊作のことをよく言わない者もいた。

しかし伊作の父母たちは、永年伊作の送金する生活費で、この樽泊で余生をおくり、それぞれ七十を越えてから死んでいた。村を嫌った伊作が若年で京にとび出ていって、えらんだ職業が妓楼であったわけである。

戦争という理由もあって、藁屋根の軒のひくい家に帰ってきて、父母たちの死んだ座敷で、床の間にいま枕をむけ、同じ恰好で息をひきとった伊作の姿には、孤独な生涯が現われていたともいえた。あの世から爺婆ァがよびよせたンだと、いう者もいたほどである。

かつ枝は、どことなく冷たい空気のする酒前家にのこって、伊作の葬式をひとりで取りしきった。菩提寺の浄昌寺の墓地に骨をおさめて京へ帰ったのは二日後だったが、その出発す

る前夜のことである。新仏の位牌を生家の仏壇にまつり、別れの香を焚いている時、入口の低い木戸を静かにあけて、しのび込むようにして入ってきた村男がいた。

「ごめん下さりませ。夜分に出ましてまことにすみませんが、奥さんにお目にかかりたいのでございます」

と、男は鄭重にいって、土間に立ってぺこりと頭を下げた。痩せた細い顎に無精髭を生やしている。みるからに近在の百姓男と思われた。

応対に出た久子は、男の背後に十九か二十の、すんなりと背ののびた娘が、利発そうな顔をむけて立っているのをみた。久子はウチワのような平べったい顔の眉をうごかして娘をじろっとみた。

「奥さんはいつ御出発でございますか。御出発までに、ぜひともお願いしたいことがございましてなァ……」

と男はまたぺこりと耳までかぶさったバサバサの頭を下げた。久子は奥の部屋へ走りもどった。客の模様をかつ枝につげると、かつ枝も首をかしげながら居間へ出てきた。土間をみると知った顔ではなかった。とにかく、父娘とおぼしいこの二人の客を、うす暗い十燭光の裸電球の下へ通すことにした。坐るなり男はいうのだった。

「わしは、樽泊の北にございます三つ股の在で木樵をしております、片桐三左衛門という者でございます。じつは、ここにつれてきましたゆうをな、奥さんにあずかってもらえないかと思いまして、まいりましたのでございます……。夜分のお取り込み最中にお願いにあがっ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

て、申しわけございません」

かつ枝は久子と顔を見あわせてから父親の顔と、そのうしろで、木綿の絣のきものをきて、メリンスの黄色い三尺帯をしめ、きちんと衿をかきあわせて坐っている娘をみた。

すんなりと坐高の高い娘である。顔は父親に似て、細面だが、難をいえば、少しつり上ったような眼をしているだけで、鼻も口も、造作は概してととのっている。美人というほどでもないが、素直な田舎娘らしい佳さが感じられた。

かつ枝は息をのんでから、

「あたしにあずけるって……そのお娘さんどすか」

と三左衛門に訊いた。

「へえ、いいにくいことでございますけれど、奥さんがここへお帰りになっていらっしゃると聞きましたもンで、娘ともようく相談して、まいりましたようなわけでございます。……どうぞ、ひとつ、よろしゅうお願いしとうございます」

父親は無精髭へ落ちかかりそうになった洟をすすりあげ、うしろの娘をふりかえった。ゆうとよばれた娘はこっくりうなずいて、おびえたような視線をかつ枝の方に投げたが、すぐまたうつむいた。

「あたしにあずけるって……あたしが、あんたはん、どんな商売してンのか、よう知ってはるンどっしゃろな」

と、かつ枝は娘の顔をみながら訊いた。

「そんなにええ商売でもおへんえ……世間さまでは指をささはる商売どすがな」
かつ枝はいくらか皮肉をこめていったのだ。すると父親はしょぼついた眼をすえて、
「みんな承知しておりますねや。じつは、うちには、この娘ォの下に、まだ娘が三人もおりますねや。……甲斐性もないのに、女ごの子ォをごろごろと産みましてな……ゆうは長女でござりますわいな。この娘の母親が去年の暮れから病身なもんで畑仕事ひとつせず、病院通いをしておりますんで、いろいろと銭が要るンでござります。それでな、いっそ京へ出して、何か仕事でもおぼえさそと思うとったのでござりますが、どこへおたのみしてもそんな口はござりません。即座の銭になるためには、やっぱり、水商売じゃないといけんという者もおりましてな……ちょうど奥さんがお帰りになってるときいたもんですさかい、大急ぎでたのみにきたわけでござりますわいな」
かつ枝は、三左衛門の話が両方の意味に聞きとれる気がした。京へつれていって、どこか、ほかの仕事口をさがしてくれという意味なのか、それとも、五番町の家で女中にでもつかってくれという意味なのか、判断しかねていると、父親はいった。
「何もかも覚悟しておるとゆうはいいます。奥さん、ひとつ、この娘ォの軀をあんたはんに、おあずけいたしますよってに、好きなようにお使い下さりませんでしょうか」
細い人の好さそうな眼をしょぼつかせて、哀願するようにいうのだった。この父親は、そんなにまだ老けてはいない。四十を出てまもない年ごろと思われるのに、声にも、眼つきにも生来の気弱さが出ていた。

「お母はんがわるいて、どないしやはりましたん……」
「へえ、血ィの道どすやろか。それに、ここがな、（と三左衛門は左肺の上部に手をあてた）大けな空洞がでけておりますねや。熱が出て、寝たり起きたりで、医者も、御馳走をたべて、ぶらぶらせんことにはなおらん病気やいいますさかいな、わしらの家では、もうたいへんなゴクツブシの病気でござりますわいな」
肺病で寝ているということがそれで知れたが、かつ枝は、いつかこの樽泊へきた時に、伊作の口から、雨の多い部落の日蔭の家には、かならずのように肺を患った人が寝ていると教えられて、眉をしかめた日のことを思いだした。
「へーえ、そらお気の毒どすな。ほれで、下に三人のお娘はんちゅうと、おいくつにならはりますねん」
「へーえ、この娘ォの下が十六。つぎが十三、そのつぎが七つですねや。十六の娘ォはこの春、中学を出ましてな、綾部の靴下工場へ糸繰りにいって、寄宿舎住いをしておりますけんども、まだまだ、銭を稼ぐというところへは、いっとりません。見習女工ですよってンな」
「ほれで、あんたはんのおうちは、田圃やら畑やらはあらしまへんのどすか」
「昔はちいとばかりの田畑はござりました。けんども、先代も病身でござりましてな。やっぱり、先代も舞鶴の病院で長いこと寝たあげくに死にましたンどすが、入院費やら薬代に、ありもしない身代をすっかり失くしてしまったのでござります」
「あんたが、そのお人のお子さんで」

「へえ、下に弟がいましたが、これも、大阪ィ丁稚にいっとりました。せやけど、二十七の年にようよう年季があけるちゅう年になって、船場の問屋で死んだのでございます。運のわるい家筋ですねや。せやけど、奥さん、ゆうはええ娘ォどすねや。これまでに病気ひとつしたこともおへんしな。学校も成績はええ方でございましたし、父親のわたしがいうのも何でございますが、性格もおとなしいええ娘でございます」

かつ枝は哀れをおぼえた。なるほど父親のいうとおりにちがいないと思えた。ゆうというその娘は十九だというのに、一見して勝気なものは微塵もかんじられない。器量のいい娘に似あわず、どこかしょんぼりとした、おとなしすぎるほどの佳さがあって、強いていえば影のうすいようなところがほのみえる。これは父親の気弱な性格をうけているせいかとも思われたが、顔いろも病身なために白いのではなさそうだった。地の白肌だった。生毛の生えた耳たぶにも、ふくよかな衿首のあたりにも、娘々した健康なものも感じられる。

「ゆう子はんいやはりますのんか。どんな字ィかかはりますねん」

かつ枝は娘へ視線をあてたままで訊ねた。娘ははじめてこの時声をだした。

「へえ、夕方の夕をかきますんどす」

あどけない声であった。父親が、あとをひきとるようにしてこたえた。

「名前は浄昌寺の和尚さんにつけてもらいましたンどすねや」

浄昌寺というのは伊作を葬った樽泊の菩提寺の名であった。かつ枝は、ゆうこと口の中でつぶやき、夕という字は夕霧の夕だとすぐ思いなおした。この娘なら、五番町の夕霧につれ

帰って表に立たせても、決してひけはとるまい。今日からでも客は殺到するだろうと思われた。

八人もいる娼妓たちの顔を、即座にかつ枝は頭にチラとならべてみて、これはたいへんな上玉を拾って帰ることになったと瞬間思った。しかし、よく考えねばならない。世間を知らない小娘のことでもあるし、父親の三左衛門も、木樵をして山へばかり入っているらしいから、娘を京へ出したいといっても、いったい、娘がどのような生活をおくるのか、はっきり納得させておく必要があった。かつ枝はずばりといった。

「終戦後は、昔のように、借金で軀を売らはって、稼いだお金を抱え主さんにみんな取られてしまわはるちゅうようなことは、あらしまへんよってにな。はじめから割り切って、うちらの店へおつとめにおいでやす娘はんもいやはるようになりました。そうやさかい、何も、つらいところへ身売りしたちゅう感じはおへんのどっせ。せやけど、世間はええ目でみやはらしまへん。まるで人間の屑みたいに思うていやはりますねん。せやけど、人さんのいわはるほど、つらいとこやおへんのどすえ。兵庫県の三木から来てはる雛ちゃんの世話で、これも、やっぱり三木のお百姓さんからきやはった松代ちゅう娘はんがいやはりますねやけど、この娘ォは二十三どすねや。生娘でうちへ来やはりましたんどすけど、器量のええしんしょうのええ娘さんどすさかい、ええお客はんがぎょうさんつかはりましてな、今では、あんた、おあそびやら、お泊りやらのお客はんがひっきりなしで、一日とてお茶ひかはったことあらしまへん。そうどすな。月に三、四万は稼がはりまっしゃろ。うちへ来て二年どすけど、え

らい羽ぶりどす。兵庫の家にはお父さんもお母さんもいやはりますけど、二人とも左ウチワどすわな。松代ちゃんのお部屋には電蓄も、洋服ダンスも、ええラジオもおます。みんなじぶんの甲斐性でつくらはりましたンどすさかい大きな顔どす。考えようによっては、あんたはん、まじめなとこへゆこいうて、京へ出やはったはええけど、すぐにまじめなとこやめてしもて、橋下(はしした)やら、木屋町(きやまち)のどんぐり橋あたりで、パンパンしてはる娘はんはいくらもいやはりますえ。そんなことしたら、わるい男はんにひっかかって、何にもならしまへんがな。軀をしゃぶりとられたあげくの果てに、捨てられてしまうのンが関の山どす。そんなこと思うたら、うちらァの商売は法律がみとめとるンどすさかいな、月々にお医者はんの検診もありますしな。安全どす。お客さんも安心して上ってくれはります。それでいて、あんた、頭がいたいいうて休みたかったら、みんな自由どすさかいな。無理して働かんでもよろしねや。下宿代払うて、うちにおいやすようなもンどすさかい、好き勝手にして暮せるンどっせ。今はもう、娼妓さん本位の廓(くるわ)の制度になりましたンどすえ」

三左衛門のしょぼついた眼に光りがやどった。かつ枝は精一杯切れ長の眼をなごめて三左衛門をみた。

「そら、なかなかようして下さりますのやな」

と三左衛門はぼそりとつぶやくようにいったが、うしろをふりかえって、娘をみると、

「どうや、今のおはなしのとおりやな。お前、決心してゆくか」

とたずねた。抱え主の前で、父親が因果をふくめるようなひびきが出ていた。すると、夕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com